

紡

と

未

伝

く

ち

来

統

ま

へ

か

せ

ら

富山市文化創造都市ビジョン

平成28年11月

富山市



伝統から

未来へ

とやまを

紡ぐ

富山市文化創造都市ビジョン

平成28年11月

富山市



富山市では、市民の皆さんが安全・安心に、そして心豊かに暮らせるような様々な施策に取り組んでいます。とりわけ、地震・洪水などの危機事象であるショックや、インフラの老朽化といった慢性的な脅威であるストレスなど、今日の日本社会が直面する課題に対し、地域が持つ個性を発揮しながらレジリエンス（強くしなやかなチカラ）の高いまちづくりは喫緊の課題となっています。

ではなぜ今、文化創造都市ビジョンが必要なのでしょう。

本市では、人口減少、超高齢化が進む中で、今後も一定の人口を維持しながら、将来にわたって持続可能な都市を構築するため、「コンパクトシティ政策」など、市民、企業、行政が一体となってまちづくりを進めておりますが、その原動力は、質実さと進取の気性といった、広い意味での「文化」に根ざした精神風土にあるとの考えからです。

また、平成27年3月の北陸新幹線の開業は、人やモノの交流が活発になるとともに、これまでとは異なる文化の流入も期待され、富山市が更に発展し、市民の皆さんが安全・快適に暮らしていくためには、伝統的な文化を踏まえつつ、時代の潮流に調和した新たな成長機会を見出す政策を探求・創造していくことが重要となります。

このため、平成26年度には、富山市文化デザイン懇話会（座長：上野景文杏林大学客員教授）のご尽力により、単に芸術文化だけではなく、本市に刻み込まれた歴史、風土、宗教、個人・家族観、生業、地域文化、産業などに体现された文化全体、いわゆる「富山らしさ」を洗い出しながら文化創造の理念と「6つの指針」をまとめ、更に、平成27年度からは、理念と指針をより具体化した「文化創造都市のイニシアチブ」を取りまとめたところであります。

「理念」、「指針」、「イニシアチブ」からなる富山市文化創造都市ビジョンが、市民の皆さんと行政とが、目標を共有し、相互に対話と理解を深めながら、一緒になって文化創造都市富山を築いてゆく羅針盤となることを期待しています。

富山市長 森 雅志

もくじ

ごあいさつ	4
-------	---

Ⅰ 文化創造都市とは

第1章 鼎談「富山市の文化を語る」 ……中尾 哲雄・上野 景文・森 雅志	10
第2章 創造を刺激する都市へ ……伊東 順二	30

Ⅱ 文化創造都市ビジョン

第1章 文化創造都市の理念	44
第2章 文化創造都市のイニシアチブ (自発的・独創的な取り組み)	59

Ⅲ 文化創造都市ビジョンに寄せて

第1章 文化創造都市ビジョンに寄せて 富山市「文化創造都市ビジョン」取りまとめを受けて ……上野 景文	88
理解は文化から始まる～文化創造都市ビジョンを考える ……古川 一郎	96
CONCEPT 101% ……大西 一平	106
第2章 文化を創造するまちづくりの指針に寄せて	
指針1「静」スローライフを大切にすまち ……関 幸子	116
指針2「健」歩くことが楽しくなるまち ……長友 啓典	124
指針3「結」交流力が発揮できるまち ……国吉 直行	132
指針4「感」3感力(敏感・共感・感受性)が輝くまち 須藤 晃	138
指針5「創」「ものづくり力」が発揮されるまち ……川田 文人	146
指針6「夢」ワカモノ、ワタシの夢が叶うまち ……本木 克英	152

資料編	
1. これまでの主な取り組み	162
2. 富山市文化創造都市ビジョンに関するアンケート調査概要	169



AMAZING TOYAMA

第1章

鼎談「ていだん富山市の文化を語る」



鼎談

「富山市の文化を語る」

富山市名誉市民
尾 哲雄
(富山経済同友会特別顧問)



杏林大学特任教授
上野 景文
(富山市文化デザイン懇話会座長)



富山市長
森 雅志

司会進行 古川邦男
(株式会社ラックス代表取締役)

— 今回のビジョンで、富山の歴史や風土、生業、産業、教育など広義の文化という視点でまちづくりを考えられた狙いと、文化の持つ力に着目された理由をお聞かせください。

森 行政が最終的に目指しているのは、市民一人ひとりのクオリティ・オブ・ライフ(QOL)を高め、幸福感につなげることです。QOLが高いところは吸引力を持つでしょうし、若い人たちも、そういうところで暮らしたい、働きたいと思うでしょう。

ところが、富山では昔から黙々と働くことが美德とされてきました。内なる文化性をもっと外に出し、積極性を持ってもらうことを期待して、まちづくりの一つのビジョンとして文化創造を打ち出していると考えました。

— もう一点、今回の富山市総合計画の素案を拝見すると、「シビックプライド」という言葉をよくお使いになっています。市長がイメージされている今回のビジョンの最終形とはどのようなものなのでしょう。

森 すごく難しい質問ですが、人を動かす要素は、「楽しい」「おいしい」「おしゃれ」だと思います。「おいしい」には、お得感も含まれます。その一つの切り取り方としてシビックプライドが大事で、わがまちに誇りやきょう持を持ってなければ、他の人に「富山へ来てみたら？」なんて言えません。

富山は火災発生率や生活保護率が日本一低いという、ある種の社会の豊かさというか興行きの深さがありますが、文化性もそういう要素の一つだと思います。たとえば、街の中を花で飾ってきたことによって捨て看板はほとんどありません。街を花で飾るといことが、そういう力を持っていると思うのです。街がきれいになって、おしゃれ感があって、文化性を感じることが暮らしにまで影響し、ライフスタイルを刺激する。そういう意味でも、文化が持っている力は非常に大きいといえます。

10年前には、東京から来られた人に、「おいしい店なんて全然ないです。金沢へ行ってください」と言うタクシーの運転手さんがたくさんいました。今はそうじゃない。そういう変化も、シビックプライドが高まってきたからです。

僕は、「おしゃれ」にも、ある種の文化性が大事だと思っています。人によって「おしゃれ」の捉え方は全然違いますから、広義の「おしゃれ」ですね。華やかさ、安らぎ、ゆとりなども包含した言葉として、おしゃれ感はすごく大事だと思います。

— 「楽しい」「おいしい」「おしゃれ」という三つのキーワードで説明されると、わかりやすいですね。

森 外で音楽を演奏する人たちも少しずつ出てきました。あまり知られていませんが、天気の良い日は国際会議場の隣の広い歩道に電子

ピアノが置いてあります。誰にでも弾いても
らえるように「Play me」と書いてあつ
て、そんなふうにかつてなかったような仕掛
けをしたのも、「楽しい」と「おしゃれ」を演出
するのが狙いです。これはポートルランドで見
たのを真似たんですけど(笑)。

——中尾さんは数十年にわたって経営の第一線で活
躍され、インテックを日本有数のIT企業に育てて多
くの関連会社を設立されました。また、時代の経営者
育成の中尾塾を主宰され、実は私も第一期生ですが、
後進を育ててこられました。その一方で、「第九の会」
の会長や朝間野球のチームを作るなどしてこられまし
た。芸術・文化、スポーツと地域経済・産業やリーダー育
成との関係性について、どんな感想をお持ちですか？

中尾 私は富山のためというよりも、楽しい
からやってきたんです。お金も大事ですけど、
心豊かな人がたくさん住んでいるところが本

ていたかもしれません。新たな文化創造都市
ビジョンが、そういうものを促していくもの
であればいいと思います。

——今回のビジョン策定にあたって市民アンケート
調査を実施したところ、文化、芸術、スポーツの経験が
生活や仕事に役立っていると回答した人が約5割お
られました。また、富山の気質として質素であるとか、
勤勉であるというのは非常に高いのですが、中尾さん
がおっしゃったような進取の精神は薄れてきている
のではないかという結果がみられました。

上野先生には昨年度、富山市文化デザイン懇話会の
座長として理念を取りまとめていただいて、「静・健・
結・感・創・夢」という「6つの指針」を出していただき
ました。富山市のアイデンティティーを探ってこられ
て、富山らしさをどんなふうに見ておられますか？

上野 質問にお答えする前に、ビジネスの行
動様式とは文化そのものだと思います。たと

当に豊かな街だと思います。心豊かになるに
は、やはり広い意味での文化に皆が関わって
いくことですね。

高度成長の頃の産業構造は、テレビや自動
車を造って市民生活を豊かにしたというところ
がありますが、よく考えたら産業を支えて
いるのは生活であり、地域の文化です。そうい
う意味でも文化を考えていくことはとても大
事です。

と同時に、家の中にじっとしていないで、す
べての市民が文化活動に参加するような社
会・地域であってほしい。

そこへ個々の企業も入っていったって参加しな
きゃいけません。

私は「美しい企業」を目指してきましたが、
儲けたお金で地域、社会、国へ貢献するだけ
なく、地域のなかで住民と交わり、企業同士も
交わって新しいものを創り出していくこと
です。その点が、県民性として富山には少し欠け

えば、鉄道というハードはアメリカもドイツ
も中国も同じかもしれないけど、ソフトの部
分がまったく違います。決められた時間どお
り運行するのが日本文化です。例を挙げれば
きりがありませんが、そういう目に見えない
文化がビジネスだけでなく、広く言うとな富山
を支え、日本を支えています。継承すべきもの
は継承し、もっと躍動化させたほうがいいと
ころは躍動化させていくことだと思います。

もう一点。私は最近、香港にしばらくおりま
したが、香港には中国から若い人がどんどん
来ています。日本のバスは、高齢者が少なく
ないせいか乗客が席に座ってから走り出しま
す。香港では乗車するとすぐに走り出す。良
く言えばすごくダイナミックだけれど、悪く言
うとがさつです。だから、日本に戻ってくると
静かで落ち着いていて、「品がいい」と感じま
す。

新しい文化を取り入れていくときは、品格



中尾 哲雄

なかおてつお

1936年魚津市生まれ
1960年富山大学経済
学部卒業

2015年株インテック
社長、会長、最高顧問を
経て退任

(株)アイザック取締役最
高顧問就任

富山県教育委員、公安委
員長、通産省産業構造審
議会委員、郵政省電気通
信審議会委員、テレコム
サービス協会会長、電気
通信サービス向上推進協
議会会長、富山経済同友
会代表幹事(現特別顧問)、
とやま起業未来塾初代塾
長等を歴任。

現在、富山県立大学客員

教授、富山大学名誉博士、
とやま国際センター代表
理事、中華民国工商協進
会顧問、立山黒部ジオ
パーク協会会長、カタ
ーレ富山(サッカー)名誉会
長等。

紺綬褒章、藍綬褒章、旭日
中綬章、前島密賞等を受
ける。

魚津市名誉市民、富山市
名誉市民

を一度壊さなきゃいけない場合がありますが、これを日本の社会全体としてどうしていくのかを改めて考える必要があります。最近、アメリカの学者の中に、「経済のパイは増えていないけど、日本人はこの『停滞』をエンジョイして、成熟した文化を創っているんだ」と言う人が出てきています。私はどちらかというと、そういう考え方ですね。

つまり、高齢者が増えていることもありませんが、日本はものすごい成熟社会、メンタリティーも違ってきている。今の成熟化をベースに、どんな施策を考えていけばいいのかが大事です。結論ではありませんが、「6つの指針」の中で最初に「静」に触れましたが、それをいかに「動」と結び付けていくかが非常に重要になるということです。

前置きが長くなりましたが、1点目として、とにかく当地は住みやすい。いろんな指数をみても優れています。海岸部から都市部、田園

部、山間部まですべて、日本の縮図ですよ。それがコンパクトにまとまっていて、どれもエンジョイできる。こういう4地域があるとこころは、そう多くないと思います。そういう意味で、住みやすいぜいたくな環境です。

2点目として、しかし、その良さをほとんどの方は感じておられない。あるいは、あたりまえになってしまっている。

3点目として、いいところだということを発信されない。さっきの沈黙は美德という話と通ずるのかもしれないけど、他方、重要なのは実態です。生活をエンジョイなさっているところに富山の皆様方の文化の真髓がある。これは無理して変えなくてもいいような気がします。

そういう意味で今度の懇話会の仕事は結構難しいところがあって、富山らしさ、流行り言葉で言うと富山的な個性・アイデンティティーを改めて総ざらいしようとしたわけ

です。そのアイデンティティーをさらに延長して、どう活かしていくか。日本全体にもいえることです。が、埋もれてしまった文化がたくさんあると思うんです。そこに新しいものをどう付け加えていくのか。この3点だと思えます。

——上野先生からご指摘いただいたように、富山市民は豊かで、その豊かさに慣れすぎてしまって、新しい時代を感じる感性や対応力が弱まる可能性があるのではないかと感じました。

今回のビジョンの策定に当たって映画監督の本木克英さんからいただいた寄稿に、映画の現場では若い女性スタッフがすごく多いらしいのですが、「彼女たちは夢と飯と風呂さえ用意してあげれば、どんな苛酷なところでも頑張る」と書かれています。実際、富山の若者たちは苛酷な待遇に耐えて夢を実現する気概が本当にあるのだろうかとか少々心配になります。森市長は富山の若者たちをどんなふうに見ておられますか？

森 受け取り方によっては排他性が強いということになりそうですけど、決して排他的じゃない。わかってくれる人とは仲良くオープンに付き合うところが県民性としてあります。優れたものを持っているのは自分たちでわかっているけど、無理して東京へ宣伝に行かなくてもいいという感じでしょうか。

北陸新幹線開業の1年ほど前から金沢は大キャンペーンをやっていましたが、富山市は何もしなかった。「それでいいのか」と言われたけど、結果としてキャパシティ以上に人が来ると、大切にすべきものまで壊れていってしまう。そこは避けなきゃいけない。ゆっくり評価してもらって、ゆっくり質を高めていく。入り込みの人数を競うのではなく、わかっていただけの人をゆっくり滞在してもらおうなことを目指していくのが富山型だろうと思います。

僕は、若い人はずいぶん頑張っていると思



上野 景文

うえの かげふみ

杏林大学外国語学部特任教授、文明論考家、元駐バチカン大使

1970年東京大学教養学部教養学科を卒業し、外務省に入省。1973年ケンブリッジ大学経済学部卒業(2004年同大学経済学修士)。O.E.C.D日本政府代表部公使、スペイン公使、在メルボルン総領事、駐グアテマラ大使(2001~04年)、駐バチカン大使(2006~10年)など歴任し、2010年退官。2011~15年杏林大学外国語学部客員教授。2012~15年立教大

学兼任講師、2015年より国際日本文化研究センター共同研究員。2016年より杏林大学特任教授。主な著書「バチカンの聖と俗」(かまくら春秋社)、「現代日本文明論」(第三企画)

いますよ。高等教育機関のキャパが小さいから、いったん富山を離れる人は多いけど、最近では帰ってくる人がずいぶん増えています。30歳ぐらいになってから帰ってくる人もいっぱいいます。

中学生や高校生にもパワーのある人が出てきていますね。かつては、甲子園で活躍してもプロ野球へ行く人はあまりいなかった。中学のときにサッカーで活躍しても、高校のサッカーチームが優勝するなんてことはあり得なかったのですが、富山第一高校が全国一になり、確実に変わってきています。

だから、若い人も意欲は旺盛なんだと思います。ただ、親も含めて、「塾へ行って偏差値を上げて国公立大学へ」という傾向は変わらないどころか、深化している。決していいことだとは思いませんが。

——新聞には、東大をはじめとする国公立大学に何人

というキーワードが出たので、私はあえてダンディズムを強調したいですね。

もう一つ、文化とは落ち着いていること。私は富山の落ち着いた行動様式が一つの文化だと思っています。

上野 日本的な、ある種の秩序をベースとした文化、強制された文化ではなくて、いい意味の自発的なものですね。時間をかけて蓄積されてきたものは目に見えない文化ですけど、大事にしてほしいと思います。

コンパクトシティに始まって、どちらかというと富山は日本の縮図という面が強いと思うっていただきますけど、むしろ日本の最先端をいっておられる感じがします。文化と文明という仕分けがあつて、懇話会では文化の話をしてきましたが、それだけじゃない。まさに今、先進国を中心にして高齢化社会と環境対策は人類共通の、大げさにいうと文明的課題

合格したかという記事が出ますし、それが高校の評価指標になっています。

森 中尾さんは教育委員長もしておられましたね。偏差値だけでは計れない才能をもっと受容する教育文化じゃないといけないと思うんですが、富山はそこがちょっと問題かもしれません。

——インテックは全国に支店があり、東京にも社員が大勢いらっしゃいますが、富山県と首都圏の人間性の違いなど感じられますか？

中尾 富山の人間は、ふるさと志向が根っこにあると思います。東京にいても心の根っこは富山にあるから、いつか帰ろうと思つている。もちろん全部じゃないですけど。富山の若者が堅実なのは昔からの伝統ですが、ダンディズムは足りないと思うな。『おしやれ』

です。

富山市は、おでかけ定期券だとか、孫とおでかけ支援事業とか、歩行補助車とか、いろんなことをやっておられます。文化の域を超えて、文明的な挑戦を重ねられている。大げさにいえば人類のフロンティアを開かれているわけです。トップダウンでも構いませんから、どんどん続けていただきたい。

元東大総長(総長)の小宮山宏さんとの対談で、森市長が言っておられました。高齢者というの「地域に不可欠である」と。それを含めて私は、ちょっと生意気な言い方になるかもしれないけど、この「地域の宝」であると言いたいですね。高齢者の経験値をどう活かすか。知恵だけでなくパワーを持っておられる



方もいて、福祉という行政だけでなく、農村振興や田園地域の整備との関係でも人材活用が期待できると思います。

森 中尾さんは昔、70歳以上の人の会社を作ると言っておられましたね。

中尾 まだ夢は持っていますよ(笑)。65歳じゃないと入社できない会社にしようかなと。

上野 「6つの指針」は全部高齢者対策にも使えるというか、既に富山市がおやりになっていることが指針化されたという話だと思います。

森 平成28年度は四つのタスクフォースを作ろうと思っています。そのうちの一つは、65歳以上の仕事・働き甲斐をどう作っていくか。たとえば、65歳以上の人の雇用奨励金を作るとか、そういうのを検討してもらおうタスク

うと考えています。文化とは直接関係ないけど、その先にあるのが文化だから。

上野 地域として、お金とか人材をどういう目的に集中的に投与していくかというのは、まさに文化的判断だと思います。

— ガラス美術館・TOYAMAキラリがオープンして、高い評価を受けています。そして今度は富山駅の連続立体交差化による南北一体化ですが、これによって富山市がまた変わっていく可能性を秘めた事業だと思えます。いろんな施策を国の先頭をいく感じで進めていらっしゃいますが、今後、どんな成果が期待されますか？

森 先ほども言いましたが、最終的に目指しているのは一人ひとりの暮らしの質を上げるということなんです。たとえば、一昨日もオーバード・ホールのコンサートに行きましたが、幕間

フォースを一つ。

もう一つは一昨年、シングルマザーが働きやすい施策を考えようと作ったのと同じメンバード、今度はもつと間口を広げて、女性が子育てしながら働くためにもつと何が必要かを検討する、女性によるタスクフォースです。

— まさに日本をリードしていくような施策ですね。

森 特に基礎自治体はサイロに閉じこもりがちになって(他部門との連携を持たず、自己完結して孤立する)しま

います。新しい組織をつくるのは大変だから、ある種のタスクフォースを作って、各セクションからピックアップした職員たちに提言させよ

にワインを飲む人が増えてきています。公共交通で観劇に行くことによって、そういう楽しみ方が生まれる。ある種、ヨーロッパ型の暮らし方みたいなものを作っていくことが大事だと思っています。

— そのためにもシビックプライドを持つことが大事で、ハード整備も大事だし、いろんな仕掛けも必要です。花束を持って電車に乗ると無料にするという企画には、一年で約1,500人が参加しました。今まで花束を持って家に帰ることがなかったような人たちです。富山の人にはなかった暮らし方が少しずつ定着していけば、やがて街に花があふれ、コンサートに出かける人も増えてきます。

— それは中尾さんのおっしゃったダンディズムにも通じますね。富山の女性は働き者で、「米騒動」にみられるようにパワーを秘めながらも、日頃は質素に暮らし、いざという時はものすごいパワーを発揮するイ



イメージがあります。現代女性は、生活を楽しみながら、時代を突破していく力を持った子どもたちを育てていくことが期待されますね。

森 生産年齢人口の女性の就業率は富山市が一番高いんです。だから平日、街へ行っても若い女性が少ない。なぜかという皆、働いているから。一人に一台、車を持っているので、仕事が終わると急いで帰ってしまう。せめて土日とか、夜、少し時間が取れるときにコンサートを楽しむとか、趣味の会に入るとか、そういうことが大事なのですが、そこは過渡期だと思います。

せっかく恵まれた環境にいるのだから、女性を含めて、アウトドアを楽しむとか、コンサートに行くとか、買い物をつくりするとか。目的の物を買ったらすぐ帰るんじゃないかと、滞在時間を延ばす、街へ行くことを楽しむ、そういうことが大事です。急にはできません。

上野 意識とシステムと、どっちが先かという、両方が少しずつ変わりつつあるんじゃないですか。

中尾 もっと野菜づくりをしたらどうでしょうか？ 野菜を作るだけじゃなくて、土日に子どもと一緒に土に親しむ体験がとてすばらしいんです。こういうことも市としては考えていただきたい。

森 数年前から近所の高齢者に集まってもらってグループを作り、街区公園で野菜を作ってもらっています。戦後の食糧難の時代は公の土地で畑を作ったり、ジャガイモを育てる人がいたかもしれないけど、今の狙いは高齢者を元気にすること。採れたジャガイモで子どもと一緒に芋煮会をしたり、そういうことが暮らし方や文化を変える。行政も固定化した考え方じゃなくて、一歩前へ出るこ

から、ちょっとずつ変えていく。だいぶ変わってきたと思いますよ。

——首都圏へ進学した女性の場合、なかなか富山へ帰ってこれないという事情もあるようです。インターネットには優秀な女性がたくさん入社してこられますね。

中尾 この間も、女性の社長が2人誕生しました。

——市役所も県庁も優秀な女性がすごく多いと感じています。

森 転職が嫌だとか、そういう部分が今まであったわけです。だから総合職を選ばないとか。そこはもう少し変えていく必要を感じています。

中尾 最近は企業もわかってきていますから。

がすごく大事です。

——そういう発想ができる人が少ないのが問題ですね。

上野 ヨーロッパや中国と比べて、日本は年齢別に社会が切れてしまっています。富山は二世帯三世帯同居で普段からコミュニケーションがあるかもしれないけど、日本全体としてはそれが欠けている。

もう一つは縦割り社会ですから、異業種交流も非常に少ない。今度の指針に「結」＝コミュニケーションも出しましたが、あれも縦の壁と横の壁の両方を少しずつ壊してゆくと良いという思いで指針としました。市の行政として既に着手されているので、それをさら



に詰めていただきたいと思います。

ヨーロッパなどと比べて日本に少ないのは広場ですね。イタリアでも、フランスでも、広場にベンチがあって、そこでおしゃべりしながら、ひなたぼっこをしながら、のんびり過ごさ。広場の文化は特にラテン系の国にはしつかりあります。

森 今のご指摘は嬉しいですね。商業地で地価が一番高い大和の隣にグランドプラザという広場を作りました。街の中心には広場があるべきなんです。オープンカフェがあったり、ときには回転木馬が回っていたり、パフォーマーがいたり、そういうのを目指して作っただんです。

上野 富山市はOECDのコンパクトシティ政策報告書で世界の「5つの先進都市」に取り上げられましたが、メルボルンもその一つです。

けです。

もう一つは世代際化。これは私が勝手につけた言葉です。私が20代の頃、70代の方々と付き合ってたときに教えられました。今はそれがないでしょう。企業の中でも、地域の中でも、世代際化を進める。60代は、すごい資源なんです。この資源を地域に文化としてどう活かしていくか。自分の経験から言っても、60歳からやっと成長したんです(笑)。

—少子化とって人口減少ばかり気にしてはダメですね。

森 同感です。私が意識しているのは家族の復権ということ。戦後、個人尊重というところばかり重視されてきましたが、やはり社会の最小単位はファミリーですから。

—小学校のときから、そういう教育を受けてきたと

す。私は十数年前にメルボルンで総領事を務めていましたが、あそこもまとまっていて落ち着いた街です。メルボルンは豪州の富山であり、ひっくり返して言うとな富山市は日本のメルボルンという面があります。

—そういう「静」の文化といえますか、コンパクトにいろんなものが交わっていて、しかも田園は田園で美を蓄えておられる。引き続き、伝統と美と落ち着きを活かしていただきたいですね。そのなかで、英語で言うところのインジェネレーションというか、世代間の交流をぜひ進める。そういう意味で、孫とお出かけ支援事業はすばらしい施策だと私は思っています。

中尾 私の経営のキーワードは業際化で、これを徹底しています。いろんな企業と仲良くするためには、人間が仲良くならなきゃいけない。そうやって新しいものを生み出せるわけ

—どうか、どちらかという個人を尊重するような風潮がありますね。

森 そうというのが日本の伝統的な価値観であり、家族観であり、ある種の文化でもある。譲るとか、長幼の序を守るとかいうと批判する人も多いけど、孫とお出かけ支援事業は皆さんに喜ばれています。

上野 お話をうかがうと、ラテン系のヨーロッパと富山はよく似ていますね。自分たちのところの良さをもっと認識されると、トスカーナと同じになると思います。

中尾 トスカーナは私が世界で一番好きなところ。です。

森 僕も大好きです。最近はずぼっています。が、私は53歳からイタリア語の勉強を始めた

ほどです。

—お三方とも、トスカーナが好きだという点で見事に一致しましたね。

上野 アメリカとヨーロッパを一刀両断に仕切れるわけじゃないけど、富山市の社会の気風はヨーロッパ型がベースですよ。ただ、イタリア人は自分たちの良さをどんどん言葉で表わすのに、こちらは表わさないという違いはありますけど。

軽々に動かないということを含めて、ヨーロッパの落ち着いたところと同じです。

中尾 僕は俳句や短歌の会にも所属しています。絵を描くとか、演劇、音楽、何か一つでもいいから、すべての市民が広い意味での文化活動をやってほしい。

ど、作品としての富山市、英語式に言うと、「THE TOYAMA」ですよ。これをさらに盛り立てていただきたい。それが、まさに文化創造都市ビジョンそのものだと思います。文化的な意識の結晶として市政があつて、ライフがあるように感じられてなりません。

—上野先生、最後にうまくまとめたいのでありますがどう思います。中尾さん、森市長もどうもありがとうございます。

平成28年3月31日

富山第一ホテル13階 ルミエール

—市民一人一芸みたいな形ですね。今のお話をうかがっていて、やわらかい個人主義的なものが富山にもこれから必要になって、ファミリーを中心としたコミュニティが形成されていくのかなと感じました。

中尾 富山は時間も豊かですね。コンパクトで、ちょっとしたところへ短時間で行けるでしょう。東京は朝の通勤にも時間がかかるし、目的地へ移動するのにも時間がかかる。富山の時間は、地方都市の中でも特に豊かだと思います。

上野 都市は全体で一つの作品だといえます。ソフト＝普段の生きざまからハードに至るまで皆で中身を高めていって、それを継承していく。富山市民は意識しておられないかもしれないけど、そういう点でヨーロッパと共通しているんじゃないでしょうか。生活のクオリティーをかなり自覚しておられるわけだけ





第2章

創造を刺激する都市へ



創造を刺激する都市へ

伊東 順二



2015年度の富山水辺の映像祭でグランプリを獲得した作品「東京コスモ」は11月の受賞以来一月足らずで100万アクセス、1万ペイパービューを達成した。8年目にして最大の成果を上げたのも、この映像祭が8回を迎えてようやく認知されたことを示すとともに、若者の夢の実現をする都市を目指す富山の記念碑的な成果である。今までは東京を始め大都市を発信源としてきたデジタルアートが地方からの新しい発信をも可能になったことを証明する事実だったと思う。地方からの文化発信はメディアの革新によって様々な

結びつきが可能になる時代を迎えて、いよいよ新しい局面を迎えつつあると実感している。しかし、なぜこのような挑戦的な試みを、時間をかけて富山だけでなく地方創生のもとに各地域が取り組んでいかなければならないのか、またそもそも現在のどのような発達した情報化社会の中でまるで交通における自動運転のように表現の展開が相似する時代にあつて、なぜ地方が日本文化の次世代の担い手として期待されているのか、そのような基本的な疑問がそもそも議論されていないように感じるのは私だけだろうか。

西洋語において文化を意味する語(cultura)は信仰を意味する(Culta)の派生語であり、例えば同じ語幹を有する耕作(cultivation)のように、土地固有のものやもしくは土地そのものと関わる状況もしくは行為を指すものであると言われている。一方、文化と対をなすように用いられる文明(civilization)は市民を意味する語(civil)から派生している。人間が構築する社会の展開を意味している。その意味ではこの二つの概念は対局的な意味合いを持つていると言える。

ア的のそれと漠然とした了解があると言うほかはない。

つまり、個別的な地域の特徴を強調する文化と社会構造の普遍化を広めていこうとする文明。しかし、情報化社会が急速に発達し、個別な地域と情報を同時にネットワークし、時代や社会への認識の共有が広まっている現在では文化と文明の意味的境界線は限りなく曖昧なものになっている。強いて言えば、文化はソフトウェア的な領域感、文明はハードウェア

重要なことは、そのような認識の変化に伴って、私たちも文化の概念またその表現の方法も変えていかなければならない、ということである。1980年代から続く、「第三の波」とアルヴィン・トフラーが名付けた情報革命による地球規模的社会変化に人類はまだその未来の在り方を見出ししていない。しかし、だからこそ様々な固有性を有する地域からの発信が重要で、その相互の差異を乗り越えて各地域が相互で共有し得る世界観の上で地球という星の文化が成立しなければならぬ。しかし、それは衝突の上での解決であつては決してなく、相互の尊敬の上で成立しなければならぬ。言葉を変えれば、文化創造都市という曖昧な表現の上に現実的に実現しなければならぬものは理想的な社会像の提案であ

伊東 順二

いとつじゅんじ

美術評論家、東京藝術大学社会連携センター特任教授、副センター長、富山市ガラス美術館名誉館長
長崎県生まれ。早稲田大学仏文科大学院修士課程修了。展覧会企画、アート、音楽、建築、都市計画など分野を超えたプロジェクトを多数手がける。'95年「ベニス・ビエンナーレ」、'97年「パリ日本文化会館開館企画」(デザイン)の世紀「展コミッ

シヨナリ。'00年〜'01年「文化庁メディア芸術企画展「フロテューサー」'05年10月〜'13年3月富山大学教授。'08年〜'12年「金屋町楽市フロテューサー」'10年「金沢・世界工芸トリエンナーレ」キュレーター。'11〜'13年「九州芸文館」アートプロジェクトフロテューサー。'02年「日本政府「芸術文化勲章」シユヴァリエ」受章。前長崎県美術館館長。富山市政策参与。パリ日本文化会館運営審議委員など。

り、その多様な理想の上に人類と地球の融和的未來が結ばれるものでなければならぬ。

政策参与として市政にかかわりすでに10年近い月日が経つ。職も長崎県美術館長、富山大学芸術文化学部の教授兼業から現在は東京芸術大学に身を置くが、コンパクトシティの実現を掲げる森市政の文化面のアドバイスを主に担当してきた。富山市ガラス美術館図書館の開設はその意味では私にとっては大きな区切りであると思っている。それはその10年が森市長の長崎県美術館訪問という出来事から始まったからである。

長崎と富山、一見全く異なった都市の姿である。どちらも湾岸に展開する都市とは言え、地形的には全く異なる特徴を持っている。それは丘陵型と平地型とも言おうか、都市的展開が正反対にある都市といっても良い。都

なく、その特異な丘陵居住地の展開が自然発生的なコンパクトシティを実現しているからである。

市の経済構造も観光重視型と産業重視型と別れている。しかし、異なった観点から見れば両者の置かれている状況は共通している部分もある。一つは人口が40万人ほどという規模であり、また減少傾向にあるということ。さらに北部九州と北陸を代表する都市として福岡と金沢という象徴的な都市が近隣にあるという立地だということである。森市長がおそらく興味を持たれたのはそのような状況にある長崎が新世代型の美術館を開設することで既存の都市に上書きするような街づくりを始め、活性化をし始めたことだったのでないだろうか。県立美術館とは言え長崎市もその計画には深く関与していた。今では高く評価されるようになった長崎さるく博も美術館建設なくしては成立しなかっただろう。森市長と彼が掲げるコンパクトシティ計画も実は到達しようとする都市構造が長崎に近い。なぜなら、長崎はその地形によりコンパクトであるしか



TOYAMA キラリ

しかしながら、都市構造がいかにコンパクトであっても有機的に市内の各地域が連携していなければその総体がそのままコンパクトな実態に結び付くとはとても言えないし、そのような断絶を抱えた市街地はいくらでもある。実は長崎も全体が一つの統一的な姿を持つものでは決していない。むしろ、江戸時代からの和漢蘭文化、つまり和洋中の極端な差異を持つ地域文化の集合体がその実像である。コンパクトな都市構造の中に異なった文化を持つ社会がそれぞれの生活圏を移植し確立する。外交的、経済的、時代的必要性はあったとはいえ、そこは常に生活慣習や宗教、経済レベルなどさまざまな点において対立と衝突の危険性をはらんでいる。そのため行政機構はその融和と共生の実現のために常に実験的な試みを行っていかねなければならぬ。長崎の場合、幸い類似する先行例が近くに存在していた、博多である。この日本海に流入する那珂川の中

て、その実質的な融和において欠かすべからざる前提が文化の共有だったことは間違いない。しかも、それは多様な生活慣習や飲食、思想時には言語を超えて合意されるものでなくてはならなかった。ゆえに最も寛容で必要な前提は各共同体のバランスと相互のリスベクトの醸成だった。そこで生み出された文化表現イベントが「長崎くんち」である。市内を七つの地域に分け、各民族が協働で催しを競う。しかも、諏訪神社に奉納する出し物を披露できるのは7年に一回である。長崎奉行が積極的に支援したこの祭りは「博多山笠」や「博多どんたく」のような文化融和のために苦肉の策であり、城という権力の象徴を欠く都市のある意味の民主的な融和方法だったのではないだろうか。

いずれにせよ現代に通じる都市的問題を文化によって各地域を超えて、言わば文明化さ

州を中心に展開してきた都市は古来日本の外交の原点であり、国際貿易の拠点であった。そのため異邦人社会が早期に確立され日本人社会と共生を始めたのである。17世紀頃には中国人、朝鮮人の比率が5割近いものだったという。そこで秀吉を始め為政者が心を砕いた融合の方法は都市計画による構造のデザインと共有する文化の創生だった。町割りと呼ばれる区画整備は室町時代末期から活発に城郭建設とともに盛んに行われるようになったが、その多くがそのまま現代の日本の基本的な都市構造として翻訳されている。

博多や長崎の場合は城郭を中心とせず、純経済的で政治的な必要性による集合であること、また異邦人の割合を多く持つことが、統一した社会を持つための特異性と困難さを持っていた。その意味では現代の都市と類似する成立要件を持っていたと言えるだろう。そし

れた文化の創案によって解決するという先見的な事例とも見ることができると思う。そして、その手法の現代化が求められる時代にあって、追加された都市拠点が出島の復元と長崎県美術館の創設だった。付け加えれば、電車とバスという交通依存から互いに隣接する拠点を増設することによって歩くという興味をかきたて、さるく博を創設することで各地域間の融和を再生し共有する文化の復元を目指したのである。幸い、そのような社会を背景に、「呼吸する美術館」というテーマを掲げた長崎県美術館の存在とマネジメントは歴史的拠点と結ばれるだけの成功をおさめていた。年間70万人の動員と、50%のリピーター率がそれを裏付けていた。コンパクトシティの帰結を共有する文化の創造に見ていた森市長にとって彼が目指す文化拠点のイメージに近いものがあつたのかもしれない。

森市長の長崎県美術館訪問の当日、当時市長を務められていた伊藤一長氏と文化によるまちづくりについて語り合う機会があった。そこで私が提案した企画が両市で共催する映像祭の実現である。10年前のことである。時代はPCの登場、携帯電話の普及による情報のネットワーク時代に向かっている。東京から地方へと文化や風俗のヒエラルキーはいずれ崩壊し、ピア・トゥ・ピアのようなダイレクツな地域間の交流の時代が始まるだろう。その時、そのつながりを決定づける要素は、「祭り」に代表されるようなコンテンツの共有であり、それは今後、文化の新しい波をもたらすに違いない。「水辺の映像祭」の両市同時開催はそのような時代において、最もかけ離れた地域という印象が持たれる二つの都市においてインターネット、携帯電話のネットワーク等を介してこれからの需要が見込まれるデジタル化された映像作品公募を行い共有して



富山水辺の映像祭

いこうというもので、二つの特徴を持っている。長崎では美術館を中心に、富山では新しくできたグラウンドプラザでそれぞれ市民参画型のイベントを行うことと、それぞれ民間のボランティア組織を構成することだった。

今では富山のみで開催になっているが、前述のように数々の素晴らしい作品を世に出している。しかし、目的はもう一つある。それは大量のコンテンツの蓄積によって都市の存在感が変化していくことである。私たちはすでに2,000を超えるさまざまな形式のデジタルコンテンツを有している。しかも、それは毎年決めるテーマに沿って製作されたものであるから、美術館の所蔵品のように展開可能なコンテンツである。これほど多くのデジタルコンテンツの集積を持つところは大都市でもなかなかないが、それがこの映像祭の真の目的の一つでもある。つまり、ネットと共存する現代社会においてはその都市の規模ではな

く、包含するコンテンツの量が都市的価値を左右する。ゆえにこれからの時代においてコンテンツを内製する都市の重要性がさらに増していくと思う。これからの地域は存在するだけでは足りない。地域に根付いたメッセージを創造し、その中で生まれたオリジナルなコンテンツを発信するという、行動性、可動性が重要なのである。

映像祭で生まれたオンラインコンテンツとリニアな考え方に基づいた地域ネットワークの方法論は富山市における「富山芸術環状線ART GO ROUND」を始めとしたグラウンドプラザやフォルツアの活性化事業に展開していくことができた。それはハードとソフトの同時展開なくしてはできないことだったと思う。地域連携のノウハウは金沢、高岡とのアナログネットワーク事業「ツール・ド・日本海ママチャリラリー」などに活かされていた。

そして、コンパクトシティを前提とした市内部のコミュニケーションの活性化によるオリジナルな文化発信は環状線の開通を前提とした富山駅と市政長年の悲願であった富山市ガラス美術館図書館「キラリ」の整備に尽きるだろう。特に、キラリの策定に当たっては計画当初よりチーフアドバイザーとして過去数々のプロジェクトでパートナーシップを組んだ隈研吾と協働して完成まで携わることができたのは深く印象に残る事実である。

策定にあたって、特に市長に進言したのは図書館と美術館のブリックエリアをハブとした連結による新世代型の文化施設像である。このプランは今まで携わった長崎県美術館や森美術館、九州芸文館などの経験を通して確信したものであるが、繰り返しになるが、現代の高度情報化社会においては知識と経験は草の根のように絡み合いながら展開していく。

ある。そのためには市民がその活動の主役でなくてはならない。各階に設けたブリックなエリアはいわば市民が活躍する舞台である。それは北陸特有の夏の蒸し暑い日や降りしきる雪の日においても、自由に思いのたけを表現できる。このような施設が実現できるのは今富山市だけであろうし、それはただ富山の創造する力とそれを支える人力が育っていることを告げるものかと思っている。そのため、各施設の担当者たちはすべての常識を捨て現在の富山市の表現力に適正にフィットするために、古びた常識を取り払い、創造を支える企画と運営に力を尽くしてほしいと心から願っている。

そのような時代にあって、単一な分野のみでの経験と知識の提供を前提とした施設はいずれ社会に取り残されていくに違いない。中でも人間の知的経験の基本である「読む」と「見る」ことは元来分離できない経験のほずである。とすれば、両館の同時整備という好機を生かして次世代の文化施設像を提案することは焼け跡の中から現在の姿まで復興し、コンパクトシティをメッセージとして新しい都市像を発信しようとする富山市の事業としてその実現において大きな布石となるものである。

「透き通る」、それが今回提案したコンセプトのキーワードである。知識と知識が相互に通い合い、それが街の感性基盤として様々な街区に浸みわたっていく。正しい知識と研ぎ澄まされた感性は心身の健康を生み、自然に満ちた環境の中で地球が融和と社会の進化のための優れた創造的な人材を生み出すはずで

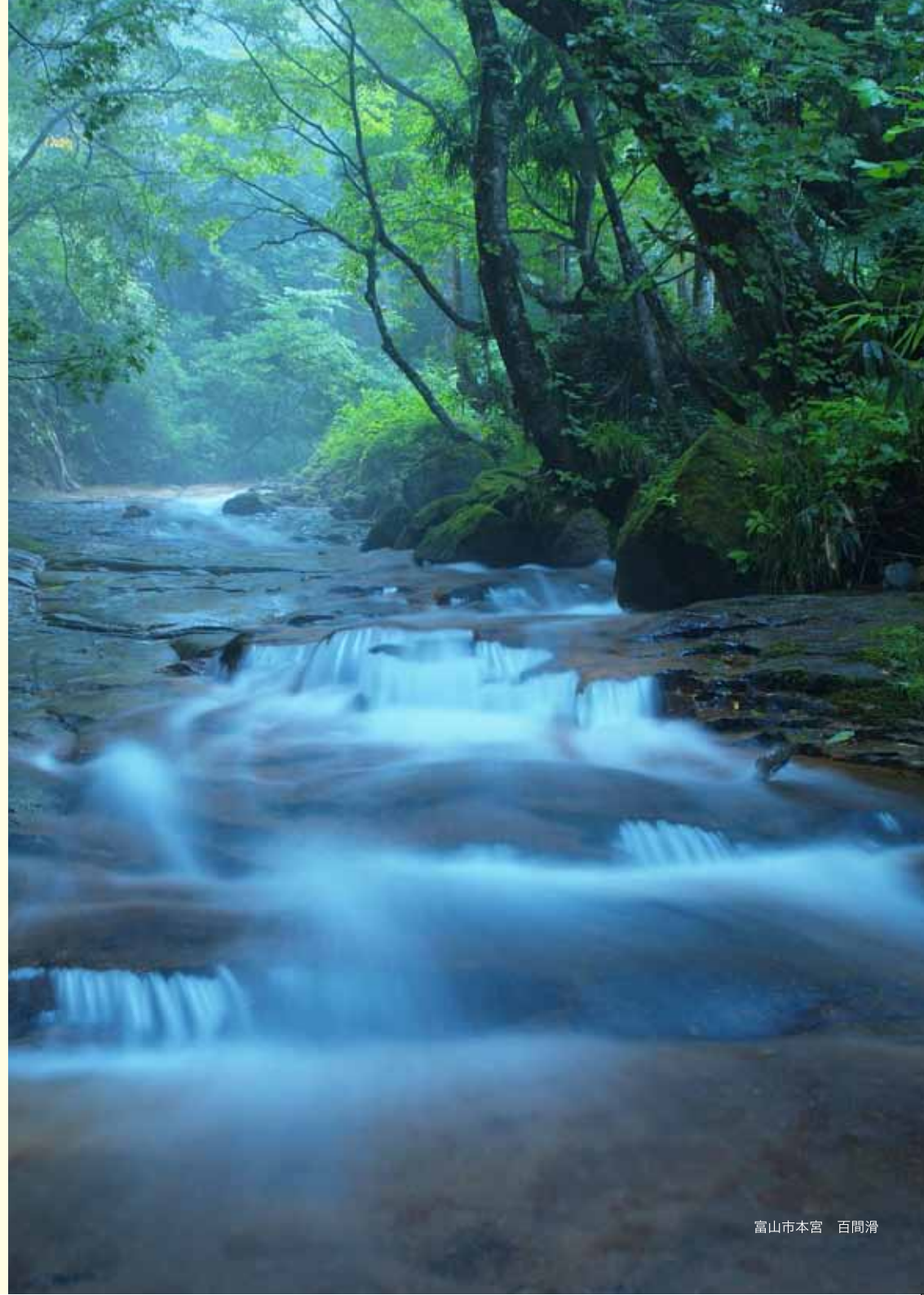


富山水辺の映像祭



第1章

文化創造都市の理念



文化創造都市の理念

富山市文化デザイン
懇話会

座長

上野 景文



委員

古川 一郎



委員

大西 一平

1 今、なぜ「文化」なのか

転換期を迎える富山

東に雄大な立山連峰を仰ぎ、北には海の幸、豊富な紺碧の日本海を臨む富山市。富山市民は古より、豊かな自然の恵みを享受しながら、幾多の災害や先の大戦の戦禍を乗り越え、高度経済成長の波に乗り日本海側有数の中核都

市を築いて来ました。

今日、少子高齢化、人口減少、更には、社会の成熟化など、内発的な構造変化が進んでいることに加えて、グローバルゼーションの深化、更には、北陸新幹線の開通(平成27年3月)という外的要因が加わり、富山市民は未だかつて経験したことのない転換期を迎えつつあり

ます。

特に、新幹線開通により、東京圏が身近になり、人やモノの交流の活発化を通じて、富山の自然や歴史・文化が知られることが期待される一方で、これまで大事に守り育まれてきた地元文化など富山らしさを失う恐れがあります。

流行や文化の東京偏重という傾向が強い中、20年、30年後の富山を考えた時、富山が持つ個性を発揮し、さらに魅力を高めた都市となり、その魅力を国内外へと発信し、新しい時代においても「富山に生まれてよかった」と実感できる富山を創る政策が求められています。

この「新しい時代のまちづくり」は、医療、健康、福祉、教育、国際交流、交通、都市行政、環境、産業、宗教、芸術文化、スポーツなど幅広い分野を網羅する形で検討される必要がありますが、その際、まずは、富山の文化的アイデンティティー(富山らしさ)を洗い直す必要があります。すなわち、各分野につき、これまでの

富山らしさ

取り組みをレビューし、未来像を模索するに当たっては、「文化」という視点を一つの基軸に据えるべきと考えており、その成果は、今後策定される富山市の「文化創造都市ビジョン」への基盤を提供することになります。

富山の文化的アイデンティティーを洗い直すにあたっては、まず、「文化」という概念を整理する必要があります。

「文化」とは、人によりさまざまな捉え方がありますが、広義では人間が自然との関わりや風土の中で生まれ育ち身に付けていく立ち居振る舞いや、衣食住をはじめとした暮らし、生活様式、価値観など、人と人の生活に関わることの総体を意味します。

それゆえに、「文化」とはそれぞれの地域や都市により異なり、また、それぞれの「文化」は

互いに影響を及ぼすことで、それぞれの「文化」もまた、変容する可能性があります。

富山に暮らす人々の生活を形づくってきた「富山の文化」も、一朝一夕に成り立つものではなく、歴史により積み重ねられ、先人の知恵

を集積して綿々と今につながっています。

その意味から、他との比較や歴史を踏まえ、富山の文化的アイデンティティーを洗い直すことにより、先ずは「富山の文化」を浮き彫りにするところから始めましょう。

2

富山の文化を洗う

富山市は、多様な地域性を有しており、豊かで厳しい自然に育まれてきた風土や伝統に培われた営みの中で、質実さと進取の気性の精神風土が発達し、今日に継承され、生業、底力のある産業、彩り豊かな芸術文化などを育んでいます。

歴史とまちづくり

古来、富山市は、3,000メートル級の立山連峰から流れ出る急流河川の氾濫・洪水など甚大な自然災害に見舞われましたが、先人の不屈の精神により、治水事業を行い、田地を

開き、山の恵み、水の恵み、海の恵みによって、まちを創ってきました。

江戸時代には、弛まぬ努力と情報収集によって全国に商圏を拡大した富山売薬は、「先利用後利」という独自の方法で富山を代表する産業として発展し、それは、製薬業にとどまらず、関連する印刷業やデザイン、情報産業などの礎となっています。

また、北前船による北海道交易は、農業生産力を高めるとともに、昆布に代表される独自の食文化を創っていきました。

これらの産業がもたらした資本は、「治水」から「利水」へと踏み出させ、電力会社を興し、その電力と水は重化学工業や精密機械工業の発展へとつながっていきました。

そして、先の大戦により大半が焦土と化した市街地は、市民の一丸となった不断の努力によって新しい街並みへ生まれ変わりました。戦後、数次の市町村合併を経て発展を遂げ

た富山市は、将来の人口減少と高齢化に対応した低炭素型の環境に配慮した社会を見据え、まちづくりの基本方針を「公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくり」として、全国初の本格的LRTが運行され、また環境未来都市、環境モデル都市に選定されました。そして、平成26年にはこうした時代を先導する施策の取り組みが世界的に評価され、国連のエネルギー効率改善都市に、さらにロックフェラー財団による100のレジリエント・シティに、それぞれ日本の都市で初めて選定されるなど、まちづくりの手法は国内外の注目を集めています。

芸術・文化政策

また、文化政策については、各種文化施設の充実を図りつつ、「桐朋学園富山キャンパス」、「富山市民芸術創造センター」、「富山市民芸術文

化ホール」等の開設など、芸術に触れることのできる施設や機関の充実を図り、さらにスポーツの振興に取り組んできました。

新しい地域文化を醸成しようとする取り組みとして、昭和60年からは配置薬の容器に使用されてきたガラスに着目し、「ガラス造形研究所」、「ガラス工房」を設置し、「ガラスの街とやま」をテーマにさまざまな事業を展開してきました。

平成27年8月には、中核施設となる「富山市ガラス美術館」がオープンし、図書館が併設されることから、市民の街への誇りや文化意識を高めることが期待されています。

また、時を同じくして、平成27年3月には、「エンジン01文化戦略会議オープンカレッジin富山」が開催され、日本を代表する多数の文化人、知識人、芸術家たちと交流した市民が、知的好奇心を満たし世界観を広げ、将来の地域文化の活性化や地域資源の魅力を考える

絶好の機会を提供しました。

富山の文化風土

「澄んだ日の立山」。慣れ親しんだ市民も、初めて富山に訪れた人も、その雄大で荘厳なる美しさに感動します。朝どれの魚が毎日食べられ、蛇口を捻るとモンドセレクション最高金賞の水道水が出てくるなど、他都市が羨むほどの生活があります。

伝統的に、富山市民は骨身を惜しまず黙々とよく働き、「勤儉貯蓄」を心がける実直さ、合理的で実行力があり、進取の気性に富み、家族を大切にし、親戚、隣近所が助け合い、信仰心が厚いと言う特色があります。

それは氾濫を繰り返す急流河川との闘いの歴史、冬期積雪下での忍耐の歴史に育まれ、「ものづくり」を中心とした産業構造を築き、広い持ち家、三世代同居、高い女性就業率、教

育熱心さにつながっています。

また、富山の女性は辛抱強く働き者と形容され、また、自分より家族を優先する意識が強い反面、大正期に起きた「米騒動」のような「行動力」を持ち併せています。

富山の一般的なライフスタイルは、「広い家に三世代で同居し、大人の数だけ自動車を保有し、夫婦共働きで家計を支え、教育熱心で近所・親戚づきあいを行い、団体活動にも参加し、休日は自家用車で買い物、祖父母が孫の送り迎えや家事を助ける」という特徴があります。

しかし、一家総出で働き、豊かさを享受する富山は、現状に満足し、新しい時代を感じ取る感性や対応力が弱まる可能性があります。また、過度な自動車への依存は、歩かない生活が当たり前となり、健康寿命の維持・延伸に影響することが懸念されます。身内偏重や地縁の強さは、地元で古くから使われる「旅の人」という言葉に表されるように、外部からの流入、

交流を弱め、自由な交流を求める若者にとつて息苦しさをもたらしていく恐れを内包している面を否定できません。

日本・北陸の中の富山

近年はLRTに代表される「公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくり」が注目されている富山ですが、日本の中の富山、北陸の中の富山という視点から見ますと、「立山」、「売薬」、「ます寿司」、「全日本チンドンコンクール」、「越中おわら」が代表的イメージと言えます。

「富山のくすり売り」で知られる「売薬」は全国津々浦々まで浸透し、国民の健康に貢献してきました。そこには堅実な市民性の中に「ものづくり」技術とともに、顧客との優れたコミュニケーション能力が秘められています。

富山県は幾度かの変遷を経て、石川県から

分県する形で明治16年に置県され、明治22年4月1日に富山市が誕生しました。この富山市の文化風土は、金沢市とは明らかに異なります。金沢市は加賀百万石の深い歴史と文化を有し、加賀宝生、加賀友禅、九谷焼など芸術性の高い文化とともに、大学が数多く立地し、観光や商業サービス面において多様性と高い集積を誇り、富山にはない伝統芸術と消費文化とが息づいています。

この金沢との違いを含め、北陸、ひいては日本における富山市の「立ち位置」をよく把握の上、日本全体、ひいては、国際社会をも意識した形で、富山の存在意義を考究する必要があります。

文化創造の決意

高齢化、人口減少、更には、グローバル化が進む中で、北陸新幹線が開業したことを契機に、歴史や風土を含めた上記の諸側面を十分に踏まえる形で、新しい時代の文化を創造してゆくことが期待されます。

3

富山の新しい文化創造

文化創造都市の理念

前節で、「質実さと進取の気性」をはじめとする「富山らしさ」を洗い直しましたが、富山が富山らしく、困難を克服し生き抜くためには、時代の変化を超える形で、先人達が培ってきた精神風土と歴史や伝統を受け継ぎ、これを糧として次の世代に伝える新たな文化を創造していくことが求められます。

将来にわたってより一層の魅力を放つまち

として存続していくためには、市民一人ひとりが郷土に愛着と誇りを持ち、住むことに幸せを感じ、いつまでも住み続けたいと願うまちを、市民、企業、行政が一丸となって追求し、実現してゆかねばなりません。

これまで確認して来た「富山らしさ」を踏まえば、富山市が目指す「文化を創造していく都市」の理念は、次のような形でまとめることができます。

質実、進取の精神風土を尊び、

「静」「健」「結」「感」「創」「夢」で新時代のとやまを築く



売薬の看板



文化を創造するまちづくりの指針

この理念の実現に向けて、「富山らしさ」を踏まえ、
次の6つの指針に沿ってまちづくりを推進するものとします。

指針1 静

スローライフを大切にするまち
◎ 郷土の豊かな自然や歴史・伝統を尊重し、昔から伝わり続くよいものと静けさの文化を大切に、自然・環境を保全し、大都市圏にはない質実でスローライフを大切にしたまちづくり
◎ 都市部、田園部共に、伝統美、機能美を含め、美的な環境の保全・整備を重視したまちづくり

指針2 健

歩くことが楽しくなるまち
◎ 過度な車依存社会から脱却し、歩くことで、身体が自然の一部になり、他者とコミュニケーションを成立できるまちであり、大地に深い親しみを持ったなめらかな歩き方をし、自然や他者と同調するまちづくり

指針3 結

交流力が発揮できるまち
◎ 男女、世代、地域、都市間、ひいては国際的な視野をも含め、それぞれの違いを認識しつつ、個性を尊重し、人と人が出会い、集い、交流を深め、新たな発想・発見が生まれるまちづくり

指針4 感

3感力(敏感・共感・感受性)が輝くまち
◎ 新しいものに敏感に反応し、市民の自由な発想と自主性が発揮され、新しいものを生み出す個性や想像力が生まれるよう、芸術文化やスポーツの振興を図るまちづくり

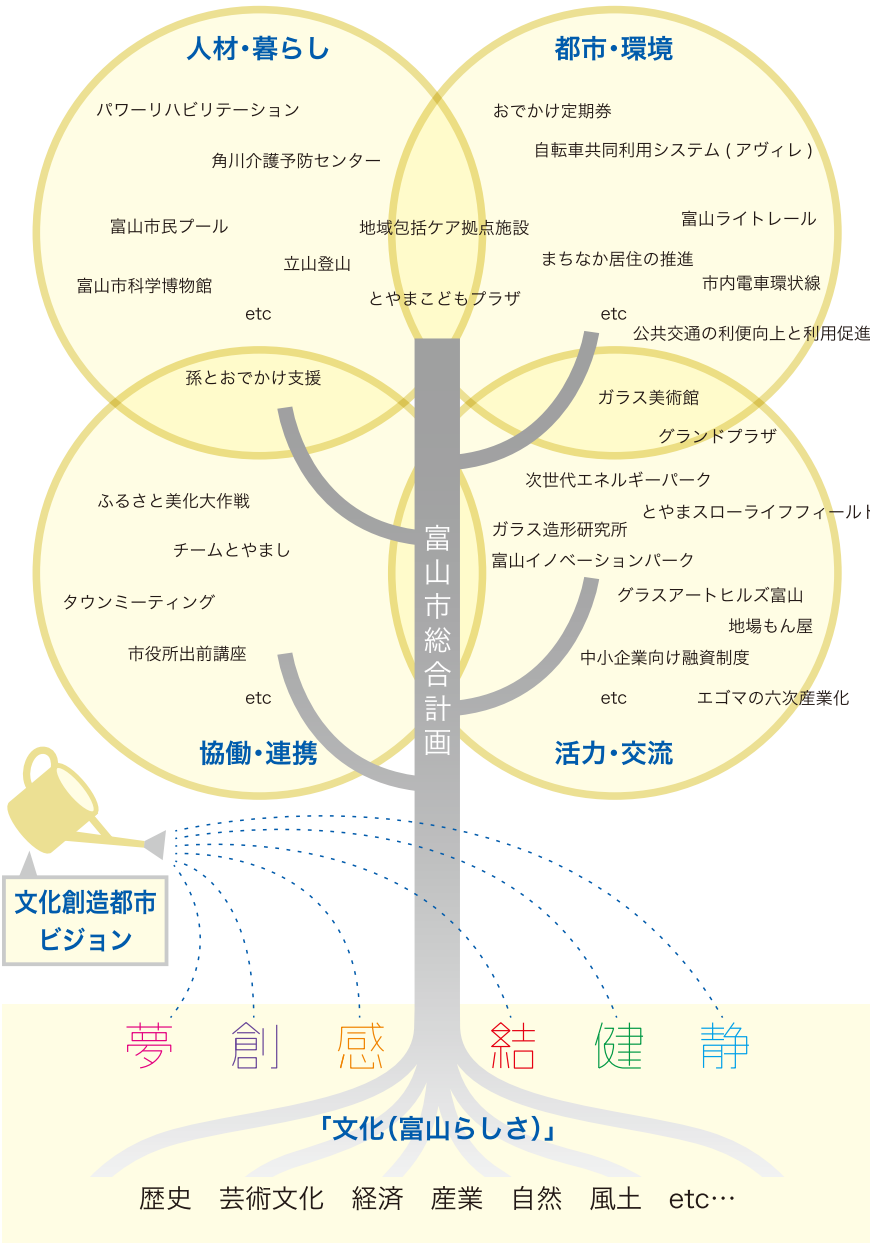
指針5 創

「ものづくり力」が発揮されるまち
◎ 「ものづくり力」をより磨くとともに、「情報力」、「高速交通網」を活かしグローバルに活躍する企業から、地域住民に寄り添う小さな企業まで多様な産業集積があり、経済活動が活発なまちづくり

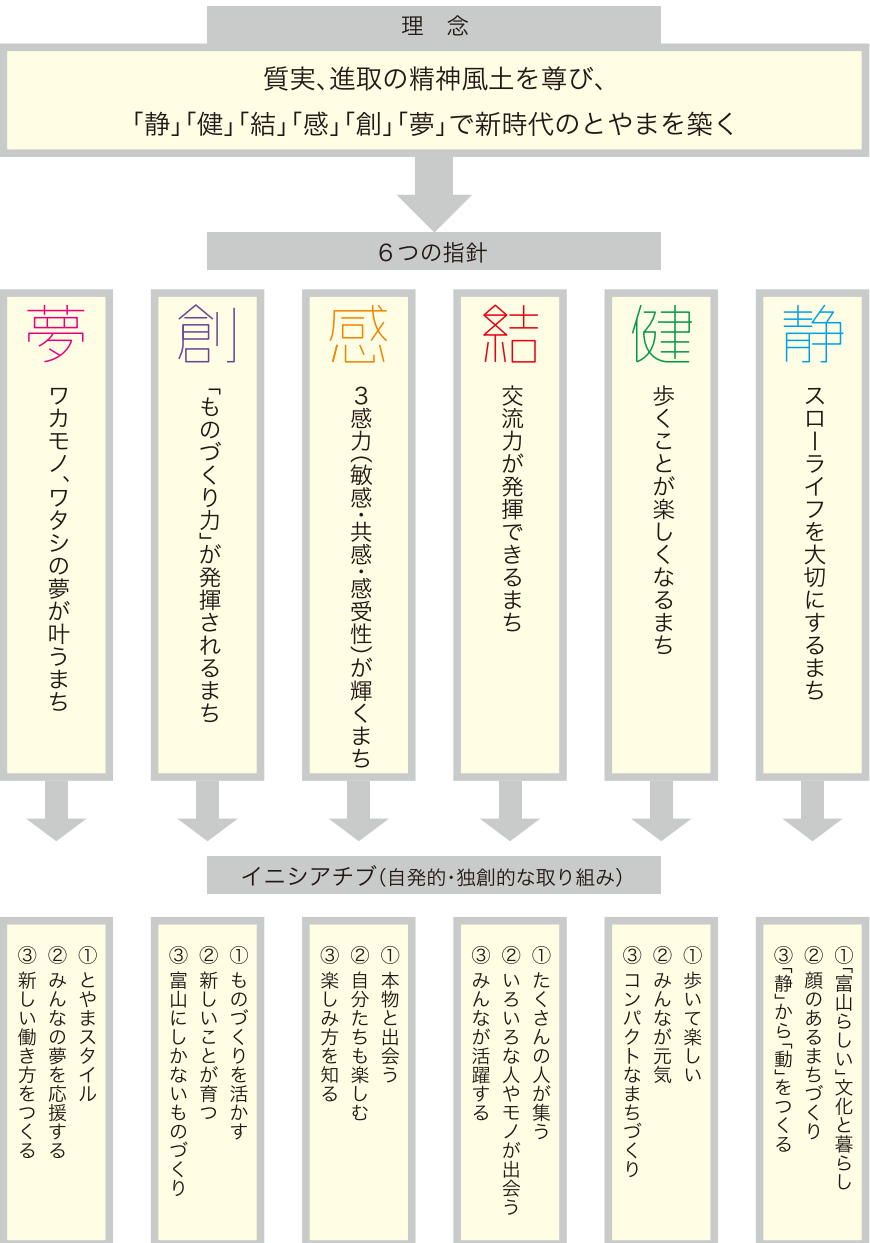
指針6 夢

ワカモノ、ワタシの夢が叶うまち
◎ ワカモノや女性をはじめ、気概を有し自己実現を目指す人々が富山を拠点に夢を形にでき、それぞれのライフスタイルに合わせた多様な働き方ができるまちづくり

富山市文化創造都市ビジョンの位置付け

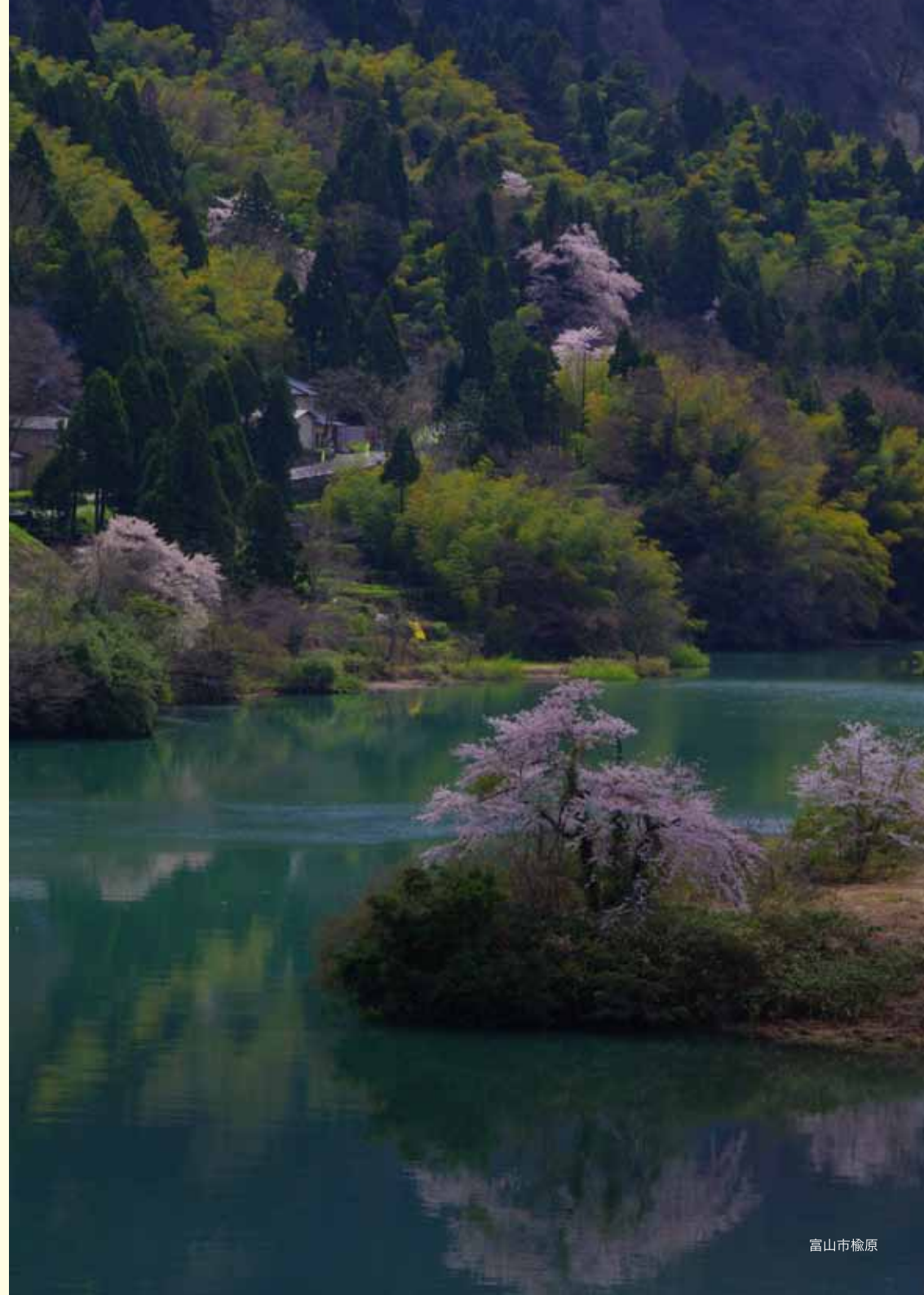


富山市文化創造都市ビジョンの体系



第2章

文化創造都市の
イニシアチブ
(自発的・独創的な取り組み)





グランドプラザ

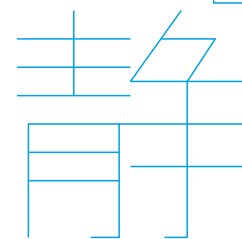
前述の「文化創造都市の理念」と6つの「文化を創造するまちづくりの指針」を本市のまちづくりや景観、デザインをはじめ、観光や福祉、教育など、様々な分野に盛り込み、芸術・文化が持つ創造性や文化の力を魅力あふれるまちづくりや都市の活性化につなげ「都市の総合力」を高めることを通して、「選ばれるまち」になることを目指していきます。

「文化創造都市のイニシアチブ」では「6つの指針」に則し、今後のまちづくりの着眼点をまとめました。



富山市寺家

指針
1



スローライフを
大切に
するまち

1 「富山らしい」文化と暮らし

市街地から望む美しい川や山の風景、風情のあるまちなみ、伝統が色濃く残る行事など、市民が愛着と誇りを感じているもの、代えることができないものを将来へ伝え、育てていきます。

日常的な暮らしの中で、「富山らしい」文化の魅力に気がついていないことが多くあります。

北陸新幹線が開業し東京が近くなった今だからこそ、暮らしている地域に対して誇りと愛着を持ち、人に自慢できるまち、人に語りたくなる物語があるまちを目指していきます。

2 顔のあるまちづくり

地域のシンボリックな景観やまちなみのアクセントとなる景観をつくり、維持していくことで、富山らしい景観となり、そこに住む人だけでなく、学び、働き、来訪する人々も、富山に住みたい、住み続けたいと感じるような地域への愛着を育んでいきます。

3 「静」から「動」をつくる

スローライフを通して人々が「集い、交わる」活気ある時間・空間をつくり、生きる活力、新しいモノ、コト等の創造力、チャレンジする勇気を掻き立てるまちづくりを推進していきます。



おわら風の盆



五百羅漢

健康

歩くことが
楽しくなるまち



バナーフラッグとハンギングバスケット



セントラム車内



ストリートミュージアム

1 歩いて楽しい

日々の生活のなかで歩いてみることで新しい発見があったり、見慣れたものの価値を再発見したりすることもあります。

魅力的な地域景観をつくっていくこと、過度に車に依存することなく暮らせるライフスタイルに応えるまちづくりを行っていくことで、歩きたくなるような魅力と必然性をそなえたまちを目指していきます。

オープンカフェやストリートファニチャの設置など新たなまちの使い方を通じて、おしゃれで、楽しいまちづくりを目指していきます。

2 みんなが元気

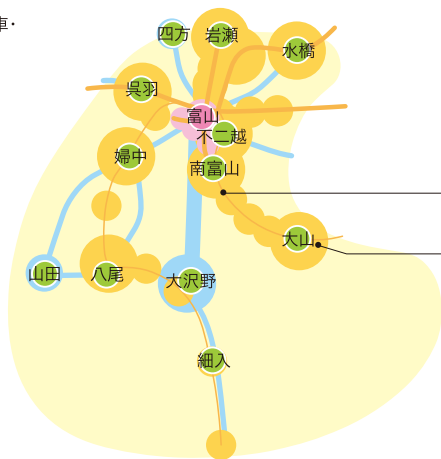
歩くこと、歩くことをきっかけとした日常的なスポーツへの関わりのなかで、生活と健康の質を高め、生涯を通して健康的な生活習慣を実践することができるとまちを目指していきます。

3 コンパクトなまちづくり

本市が取り組んできた「コンパクトシティ」づくりに一層の努力が求められます。今後、高齢化が更に進展していく中で、高齢者が自立して生活できるためには公共交通の利便性を高めていく必要があります。

地域の公共交通の維持と活性化や、AI(人工知能)を活用した車の自動運転技術の動向など、社会の変化を注視しながら、コンパクトで利便性の高いまちづくりを目指していきます。

- 鉄道・路面電車・バスサービス
- 鉄道サービス
- バスサービス
- 都心
- 地域生活拠点



富山市が目指す お団子と串の都市構造

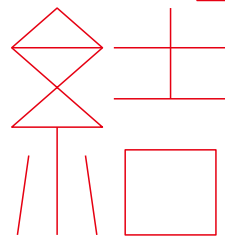
都市部だけではなく全市的に行う
コンパクトなまちづくり

- 「串」
一定以上のサービス水準の公共交通
- 「お団子」
串で結ばれた徒歩圏





グランドプラザ



交流力が
発揮できるまち

1 — たくさんの方が集う

ユニバーサル社会、男女共同参画社会、仕事と生活のバランス等の視点を大切にし、地域づくりに取り組むことを目指します。

多様な背景を持つ人たちが訪れ、滞在し、地域・文化・国籍・人種の違いを認め合い、ともに暮らし、働き、交流する地域の実現を目指していきます。

2 — いろいろな人やモノが出会う

公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくりや、中心市街地のにぎわいづくりを通して、様々な世代、様々な地域の人が集まり、年齢や肩書きにとらわれない自由で活発な人間関係が生まれるまちづくりを目指していきます。

3 — みんなが活躍する

北陸新幹線の開業をきっかけとした人材やモノの交流により、多様な出会いを通じ交流を広げ、地域の魅力を掘り起こし発信していくことにより、地域の活性化や新たな文化の創造につながります。

過去に様々な経験を積み、技術を有し、働く意欲のある高齢者が活躍できる産業、地域社会を創造していく必要があります。

人生のライフステージを重ねることは、本人にとって、また社会にとって貴重な資産となります。そうした資産をこれからのまちづくりに還元していくため、高齢者が活躍できる労働環境や産業づくり、地域づくりを目指していきます。



アメイジングナイト



アメイジングラン

感

3 感力(敏感・共感・感受性)が
輝くまち



桐朋オーケストラ・アカデミーによる演奏会



富山まちなか研究室 MAG.net



合唱



オーバード・ホール名作ミュージカル上演シリーズ ミー&マイガール

1 本物と出会う

富山市には質の高い芸術文化やスポーツに関する施設、イベントが多くあります。芸術文化やスポーツは、人々に感動を与え、感動は新たな創造性につながっていきます。北陸新幹線の開業を機会に、より幅広く質の高い「本物」の芸術文化やスポーツとふれあい、体験することができるよう、施設や環境を整えていきます。

特に文化ホールで繰り広げられる音楽や舞台芸術では、ステージと客席との一体感は、演者のパフォーマンスと観客の感動を高める大切な要素の一つとなります。また、ジャンルに見合う適度な客席数や優れた舞台・音響用設備、機材の配置は、質の高い「本物」の提供をより促し、域内外からより多くの人々が集まる仕掛けとなります。

このことから、中規模ホールの整備によって提供できるジャンルの幅を広げることで、より多くの感動と創造性、都市としての魅力の向上に取り組んでいきます。

2 自分たちも楽しむ

鑑賞するだけでなく、発表の場や機会を利用し、芸術文化活動が生活の一部となることで創造性は高まります。

市民の自主的な活動がスムーズに進むよう、効果的かつ継続的に支えていくための体制や活動の基盤を整え、活力あふれる活動が各地で行われる地域づくりを目指していきます。

3 楽しみ方を知る

「楽しい」、「おいしい」、「おしゃれ」を享受し、ライフスタイルがより豊かになることで、自分達のまちへの誇りが一層醸成されるまちづくりを目指していきます。



絵画教室



富山市民芸術創造センター

創 倉

「ものづくり力」が
発揮されるまち



製薬工場



産業用ロボット

1 — ものづくりを活かす

富山の自然や歴史といった「物語」と地域のものづくりとを結びつけながら、これまでの各産業間の枠を超えて連携を図り、新たな付加価値が生まれるまちづくりを目指していきます。

2 — 新しいことが育つ

総合的なデザイン力を活かして商品提案型・市場志向型企業への転換を図るデザイン戦略や知的財産を活かしたビジネスモデルの展開、「環境モデル都市」を牽引する事業といった「進取」の取り組みの実践やそれに伴う新たな起業を通して、新たな産業の集積につながるまちづくりを進めます。

3 — 富山にしかないものづくり

富山には豊かな地域資源があります。その地域資源を活用し、美しさや楽しさを備えたものづくりや、産業づくりを推進し、他都市とは異なる生業ともいえる産業を創造していく必要があります。効率性や合理性一辺倒とは違う企業間の交流と、若者の感性、高齢者の経験を活かし、新しい価値を生む産業が根付くまちづくりを目指していきます。



牛岳温泉植物工場

夢

ワカモノ、ワタシの
夢が叶うまち



ピートラム・ミュージック・フェスティバル



子供と過ごす



グランドプラザ

1 — とやまスタイル

富山の恵まれた環境の中で、職場や家庭、地域などでそれぞれの個性と能力を十分に発揮することができるように、ライフスタイルや価値観に応じた多様な働き方が可能となるよう応援していきます。

2 — みんなの夢を応援する

富山に住み続けながら、外へ向けて仕事をし、情報を発信している人がいます。気概を有し自己実現を目指す人々を地域ぐるみで応援していきます。

3 — 新しい働き方をつくる

北陸新幹線の開業により本市からの通勤・通学圏は大きく拡大しました。また、週末は富山で過ごし、平日は東京で仕事をするといった2地域居住の可能性も広がっています。

交通・情報ネットワークの高度化は多様な働き方、生き方を提供してくれます。若者のUターン、Iターンを促進する新しい働き方ができるまちづくりを目指していきます。

